

“ことば”と“制約” 西江雅之

物事の“可能性”や“限界”に比べて、日常的に無意識で行っていることに課せられている“制約”について、改めて考える機会は少ない。その理由は、この種の制約は、人為的に作られた法律のようなものではなくて、もともと当然のこととしか思えないものだからなのだろう。

“ことば”の場合も、“話す”ことに付きまとう根源的な“制約”については、あまり意識されることがない。

話を進める前に注意すべきことがある。ここで言う“制約”とは、日本語とアラビア語といった個々の言語間に見られる表現能力の優劣を指すものではない。ある言語で表現可能なことは、他の如何なる言語でも表現可能である。ある言語で話者たちが“何を話しているのか”ということと、その言語では“何が表現できるのか”とは、別の話題なのである。さらに、これらのことは、ここで話題とは直接には関係しない。

“ことば”を話すこと、そのことに課されている“制約”について、いくつかの例を見てみよう。その一つは、環境と身体そのものによる制約だ。言うまでもなく、わたし達はこの地上で人間並みのことができるだけである。引力や空気を前提とした環境は、そのまま“ことば”を話すことの制約となっている。また、脳、肺、気管は勿論、唇、舌などの発音調整器官が課す制約もある。わたし達は、こうした制約のなかで、そのことを一切気にせずに“ことば”を交わし合っているのである。

また、人間が“ことば”で何かを表現している時は、同時に顔の表情や手や肩などの動きが別の

意味を表現している場合が多い。現場での意味のやり取りは、いわば全身運動と、その総合的な判断でなされている。このことは、“ことば”がそもそも“伝え合い”の一部でしかないという一つの制約を示している。

文化的、すなわち後天的に身に付いた行動と、身体機能が溶け合っている制約と言えるものもある。人間は、“伝え合い”の場で話題とすることが、当人の知識や経験から離れていなければならないほど、内容を簡明に表現する傾向を強める。その理由は、問題となっていることが内容が自分自身から縁遠いために、自分の発言に責任を感じないで済むからである。さらに重要な理由は、その種の明確さは、当人の社会生活にとってマイナスとなる意味をもたらさないからである。他方、事態が重要になれば、当人は身の安全をはかるために、我知らず話題をそらすことになる。その結果、話は漠然としたものになりかねない。その多くは、嘘をついているわけではない。意図しないのに、そうなってしまうだけである。

ある文化では、特別に興味があることに直面した場合、その人物は思わず自分の本心とは正反対の表現をしてしまう。これもまた、無意識のうちに行う社会生活での保身の策であり、そのことによつて生活の安定を図ることを、意図せずに行おうとしてしまう例である。率直に自分の意思が表現できない。ここにも文化・生理的な制約が見られると言える。

また、一つひとつの“ことば”の例の背後には、話者の“立場上の意味の束”とも呼べるものがあり、それが制約として機能する。すべての発話は

にしえ・まさゆき 1937年、東京生まれ。専門は文化人類学・言語学。アフリカ諸語、ビジン・クレオール諸語の日本における先駆的研究者。東アフリカ、インド洋諸島、カリブ海域での現地調査経験を多く持つ。また、「“伝え合い”の人類学」というテーマで、現場でのコミュニケーションに関する研究に従事する。現地の人々に自然に溶け込む研究態度で、“裸足の学者”との異名をもつ。東京外国語大学、東京大学、早稲田大学、東京芸術大学などで教壇に立った。

写真・西江雅之



話者の関心、嗜好や価値観に裏打ちされて初めて実現されるのだ。

「このシャツはいいですね」と、ある人物が言ったでしょう。その人は、もっぱらデザインに興味を持っているので、その観点からそう言った。しかし、聞き手は流行面にしか興味がない。それゆえに、「いやあ、こんなものは大したことありませんよ」と、相手の「ことば」を否定するだろう。

「よいシャツだ」という単純な発話の背後にも、「デザイン」、「値段」、「ブランド品」、「流行」、「着心地」など、様々な意味が込められている。人はそうした多様な意味が束となっているものから、自分の関心に合ういずれかのものを選び、その場の人間関係に気を配りながら発言したり、相手の話を聞き取ったりする。

その話題をさらに続けて論じ合えば、互いの意味の取り違えに気付くだろう。しかし、日常の場で、発言の度に背後に隠された意味を根掘り葉掘り確かめ始めたならば、相手は辟易してしまう。「ことば」は、このように多様な制約を持つものである。如何に注意深く意味を伝えようとしても、

実際は、伝えたいことが文字通りに相手に伝わるとか、聞き手が相手のことばの意味を文字通りに受け取るといったことは望めない。日常での「伝え合い」は、こうした制約を無意識のうちにやり過ごしたり、制約を手際よく利用したりすることで成り立っているのである。

制約は、場合によっては確かに厄介なものである。しかし、人間は「納得」という都合がよい解決法を持っている。納得は、話題の知的なレベルや理解力の高さには関係しない。論理性も二の次である。ただ、当人に安堵感を与えてくれる「ことば」であるだけで充分だ。多くの人々は「ことば」の内容ではなくて、話し方や言い回しの妙につられて、他者の話に説得されてしまうものである。そして、それ以上に、「納得」は当人の側にあるものである。つまり、相手の「ことば」に「納得する」ということは、その「ことば」自体が持っている説得力だけでなく、それを受け止める当人が何を求めているのか、何に納得したがつているのかによるところが大きい。

人間という動物の「伝え合い」には、身体や文化、そして個々人の関心のあり方によって、種々の「制約」が働く。こうした「制約」に改めて注意してみると、現実の「伝え合い」は、予想以上に、「言語」以外の要素に支えられていると同時に、取り交わされる「ことば」の「言語」面がちぐはぐでも充分に成り立つこともよく分かる。